

# ケアの臨床哲学

—シンポジウムの記録—

2012年3月

「ケアの臨床哲学」研究会

代表：浜渦辰二

## 目 次

はじめに	(1)
シンポジウム「高齢社会における終末期医療を考える」	(3)
大西 和雄「緩和ケア（ホスピス）の現場から」	(6)
関本 雅子「在宅ホスピスの現場から」	(14)
橋川 光一郎「高齢者施設での看取り」	(26)
シンポジウム「高齢社会におけるホスピスを考える」	(49)
佐藤 伸彦「ナラティブホーム～家庭のような病院を」	(52)
兼行 栄子「ホームホスピス～自分らしく暮せる第二のわが家」	(63)
松本 京子「共に支え合うグループハウス～心なごむ第二の我が家」	(72)
シンポジウム「高齢社会における施設での看取りを考える」	(97)
小谷 雅敏「施設看取りの実践と職員の思い」	(99)
村田 麻起子「高齢者施設における看取りケアを支えるチームのマネジメント」	(106)
宮野 孝子「もうひとつの家（高齢者施設）でもうひとつの家族に看取られて」	(114)
シンポジウム「高齢社会における人工栄養を考える」	(135)
荒金 英樹「終末期患者、高齢者の人工栄養を考える ～栄養サポートチームの立場から～」	(138)
前田 達慶「経口摂取を試みる現場の意見から」	(148)
会田 薫子「認知症末期における人工的水分・栄養補給法」	(161)
シンポジウム「高齢社会における認知症のターミナルを考える」	(181)
中野 篤子「医療行為の代行決定について～プロセスの重要性と課題」	(183)
日笠 晴香「誰が、何を、どうやって決めるのか——認知症の場合の事前指示」	(196)
村井 淳志「認知症のターミナルとは」	(206)
シンポジウム「高齢社会におけるケアを考える」	(221)
浜渦 辰二「「ケアの臨床哲学」研究会から」	(224)
藤本 啓子「患者のウェルリビングを考える会から」	(233)
林 道也 「＜ケア＞を考える会から」	(243)
「ケアの臨床哲学」研究会活動の記録	(261)

## はじめに

「ケアの臨床哲学」研究会・代表  
大阪大学文学研究科（臨床哲学） 浜渦 辰二

私たちは、ケアされながら生まれ、ケアされながら死んで行く。その間の或る期間だけ、人にケアされながらも人をケアすることになる。ケアにはさまざまなカタチがあり、英語でケア (care) と呼ばれる行為は、日本語ではさまざまな言葉で呼ばれる。子どもをケアすることは「育児」、病人をケアすることは一部「医療」で一部「看護」、高齢者をケアすることは「介護」、身障者をケアすることは「介助」、家族をケアすることは「家事」、および他人をケアすることは「気遣い」とか「配慮」などと呼ばれる。教育もある意味ではケアと呼ばれ、心理に関わる分野ではこころのケアと言われる。こころばかりではなく、からだもケアされる。髪がケアされ、肌がケアされ、爪がケアされる。大切な服がケアされ、毛皮のコートがケアされ、革靴がケアされる。もちろん、ペットの犬や猫もケアされ、花や植物もケアされるが、同時に私たち自身も犬や猫や花や植物にケアされている。ケアという言葉の広がり、私たちが人間の営む行為のほとんどを覆っているようにも見える。だからこそ、それらが別々の日本語で訳されるのに応じて、それらを別々の行為として、別々に扱うのではなく、英語のケア（あるいは、ラテン語の *cura* まで遡ってもいいが）の言葉の広がり、身を任せて、そもそもケアとはどういう行為なのか、何がケアをケアたらしめているのか、同じ行為をしているようでも何が欠けていたらそれはケアとは呼べないのか、そうしたことを、単に理論として書物から学ぶのではなく、ケアの現場に携わる人々と、一緒に考えてみたい。そうした試みを、「ケアの臨床哲学」と呼んでみた。本書は、そこから始まった「ケアの臨床哲学」研究会のこの2年余りの記録です。

「ケアの臨床哲学」研究会という名称を初めて使ったのは、今から2年半前の2009年8月22日（土）、大阪大学豊中キャンパス待兼山会館会議室で開催された研究会においてでした。それは、主催：<社会と臨床>研究会、共催：科研「ケアの現象学の基礎と展開」（代表：榊原哲也）、愛知医科大学看護学部有志による、第一部：研究会、第二部：渡邊美千代さんを偲ぶ会という形で行われたものでした。それは、文字通り「研究」に比重を置いたものでしたが、同時に、科学研究費の共同研究に参加予定だった矢先にならなくなった渡邊美千代さんを偲ぶ（亡くなった人をケアし、残された人をケアする）という趣旨をも盛り込んだ研究会でした。しかし、その後、主催した<社会と臨床>研究会の「臨床と社会との接点」のなかで「社会にコミットする研究」という理念を継承しながら、ケアの問題を社会のなかで考えていく方向で、「ケアの臨床哲学」研究会を引き受けていくことになりました。それはまた、私が静岡で長らく市民・対人援助職（医師・看護師・薬剤師・理学療法士・作業療法士・音楽療法士・介護福祉士・病院ボランティア）の方々とともに続けてきた「ケアの人間学」合同研究会の活動を関西地区で継承し発展させていくことを、この「ケアの臨床哲学」研究会というカタチで継承していくことでもありました。

この「ケアの臨床哲学」研究会の名前で、翌年から2回、自死遺族の集い・わかちあいの会・風舎の主催する高橋卓志講演会「苦と向き合うために」（2010年2月21日）、鷲田

清一講演会「自死と向き合うために」（2011年2月13日）に協力、共催しました。上記のがんで亡くなった仲間を悼むという趣旨とは少し異なりますが、「自死遺族の集い」にも「ケアの臨床哲学」として協力したいと考えたからです。自殺者が年間3万人を越える年がすでに10年以上続き、その遺族はその数倍となるというなかで、「自死遺族」という語を狭い意味での（法律的な）家族に限定することなく身近な人の自死のこととして考えると、私たちの多くが広い意味での「自死遺族」とも考えられ、亡くなった人、残された人、さらには自殺予備軍と呼ばれる人を含めて、ここでも広い意味でのケアが求められているのではないかと、そのなかでケアするとはどういうことなのかを考えたいと思ったのです。

そして、その年2010年4月から、神戸を中心に活動している「患者のウェル・リビングを考える会」（代表：藤本啓子）と京都を中心に活動している「〈ケア〉を考える会」（代表：林道也）を繋ぎながら、大阪大学大学院（臨床哲学）の教員・院生・学部生および一般の方々の有志で運営されている集まりとしての「ケアの臨床哲学」研究会の活動が始まりました。医療施設で行われるケアの問題と高齢者施設で行われるケアの問題、さらに家庭で行われる在宅ケアも含め、これらは決して別々のものではないと考え、両者が繋がる場所でケアの持つ問題を臨床哲学的に動きながら考えたいと集まったものです。そこから、「ケアの臨床哲学」研究会主催、「患者のウェル・リビングを考える会」と「〈ケア〉を考える会」の共催という言わば「トロイカ」体制での連続シンポジウムが始まったのです。

シンポジウムは、「患者のウェル・リビングを考える会」の関心と「〈ケア〉を考える会」の関心が重なる場所として、「高齢社会における終末期医療を考える」から始まって、「ホスピス」「施設での看取り」「死生観」「人工栄養」「認知症のターミナル」というテーマを取り上げて、毎回、それぞれの現場に携わっている方々や、さまざまな分野の専門家や研究者の方々にお話しいただき、それをもとに医療関係者、介護関係者、患者や施設利用者の家族や関係者、一般の方々とともに一緒に考えてきました。途中、連続シンポジウムの流れからすると、番外編として「終末期ケアと死生観」を2011年3月12日に予定していましたが、東日本大震災の翌日となり、シンポジスト3人のうちの2人が来られない事態となり、シンポジスト1人とピンチヒッターで何とか急ごしらえのシンポジウムを開催したものの、理論家と実践者の対話という本来の趣旨を実現するには至らず、今回の記録に掲載することは断念いたしました。このことも含め、6回のシンポジウムのなかに盛り込むことはできませんでしたが、この1年間は、被災者・避難者のケア、被災地・避難地でのケアについても、あらためて考えさせられました。

という次第で、2年間で行なった6回のシンポジウムの記録をここにまとめることになりました。当初の計画では、1年間の3回のシンポジウムの記録をまずは一冊にするつもりでしたが、これも東日本大震災の影響で作業がストップしてしまい、結果として2年間分をまとめて発行することになり、1年目の記録を心待ちしておられた方々には大変ご迷惑をおかけしました。

なお、6回のシンポジウムの実施および本冊子発行は、日本学術振興会（JSPS）・学術システム研究センター専門研究員として行って来た「ケア学における人文学の学術動向調査」の研究成果の一部です。記して感謝する次第です。

2012年3月初旬 東日本大震災・福島原発事故から1年が過ぎようとする頃